おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和７(2025)年
２月号
通巻654号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和７年２月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

新皇教宮で将玄坊大善神を祀っている場所　　内田誓子さん撮影（文・８頁）

特集・再考「新皇教宮（しんのうきょうぐう）」

宗教法人大倭教教宮を関東に創設する

再録 平成元年11月15日発行『登（と）みのさと』創刊号より

法主　矢追日聖（満77歳）

２月は平将門公の命日がある月ですので「新皇教皇」について再考する特集を組んでみました。　編集部

このたび群馬県安中市原市一八九五番地中村文太郎氏住居地に、当大倭教の教導所として「新皇教宮」を創設する運びとなった。大倭への道はかなり厳しいものがあったようである。

昭和六十三年三月六日大倭神宮での月次祭に馬場美佐子（川越市51歳）と石川千鶴子（東京都47歳）の姉妹が詣られた。その切っ掛けは東京都町田市に住む得田壽之さんの紹介によるものだった。

彼女らと氏は去る二月十四日東京の将門公の首塚にお詣りして出会ったようで、その時彼女から霊的障害で一族が悩まされているので今日も此処へお詣りに来たということ、この話を聞いた得田さんは大倭の話をしたところ姉妹は早速三月六日の月次祭（つきなみさい）に大倭神宮へ詣られたのである。合縁奇縁（あいえんきえん）という言葉は古くから使われているが平将門公の命日と云われる二月十四日、しかもその首塚と伝えられた因縁の場所で大倭を紹介されるということは正に奇縁と云わざるをえないのである。

人格霊武将の示現

神宮での祭典は午後二時からである。顕祭（声を出し、形をもっての儀礼）は大倭では至極簡略に執り行うのが常であるが、幽斎は法主が霊界資格をもって独り厳粛に霊界人と共に執り行うのである。今日は関東から姉妹が見えているた

めかも知れないが、珍しく源平時代の荒武者（八階座）の強烈な霊波長を感受した。念と念とで会話交流を行った。直感では平将門公ではなかろうかと閃いた瞬間「武士の情け、どうか現世での俗名は秘めてほしい」と哀願の念が返ってきた。尚この武将霊は自分の棲息霊地を無情に荒らされたので一寸呪罰を与えたが、中村家一族の縁で大倭にて救われることになり、これに勝る果報はないと礼を低くして感謝された。勿論その取巻きには大小色とりどりの一族郎党の霊波が渦を巻いていたが、一族が大倭太加天腹にて鎮魂の座を設けることを宣言すれば騒音が納まって静寂となった。

祭典が終了して参詣者は社務所の居間に入り休憩する。茶菓が出され一息いれてから、遠来の馬場・石川姉妹を先ず招き、今日詣られた要件を聞くことにした。要約すれば、姉妹の生家は安中市の前記中村家であって、その屋敷に纏わる霊障害や神罰の実例を挙げて話された。聞いていると石碑も沢山あるし昔の神社の跡らしいような話だった。彼女らの父が文太郎氏で、この屋敷には古木も沢山あったようだが伐採した人は急死するとか恐ろしくて父は祈祷師や行者、修験者らに祓い清めの修法をたのんだり、色々と手を盡し、かなり散財もしたようだが、やはり霊験は無かったようである。写真で見ると神殿があり、鳥居もあり、又新しい五輪石塔もあって一家の苦悩の深さが想像できたのである。今日の祭典に出現した武将霊の心を汲取れば中村家とは切っても切れない深遠な因縁があるので、大倭で御霊鎮めを行ってお社に祀らねばならぬと感じたのである。然し中村家ではこの手で色々と迷わされ浪費もあったことだから話し難いものがあった。でも話せば快く承諾されたので安堵の胸をなぜおろすことができた。この武将霊の在世では誰であったか不明として、霊体に対し大倭の座では「将玄坊大善神」とこの日を縁に法主が命名したのであるが、この武将霊は喜んで拝受すると厳かに謝礼を宣べられていた。鎮座の証である小型のお社を馬場・石川姉妹が三月二十一日お迎えに参られ、更に八月二十五日には父文太郎さん（母きよさんは入院中）長女馬場美佐子さん、長男中村孝明さん、次女石川千鶴子さん、四女櫻井節子さんに紹介者得田壽之さんの六人が揃って大倭へ詣られたのである。

この時、中村家の屋敷は人格霊（武人）とは永遠に仲良く交流しながら暮さなければならない深い深い因縁の地だから、この屋敷は永久に霊地として保存保護しなければならない土地である。その責任は中村家に在るようだ。この土地が個人所有であれば代が変わるとき若し相続権などのことで難題が持ち上がって神罰を蒙ることにでもなればお気の毒と思うので、この地は宗教法人に寄付し代々その代表役員がお給仕することが最も望ましいと思う。この霊地の所有は宗教法人であり、この法人の代表役員は代々中村一族が就任すれば霊人達も中村家の御先祖達も喜ばれるし、この霊地にて霊人達の強い霊威を背景にして大倭教の理念に基づく人間形成の指導教化という聖業に挺身されることが肝要であることを話したのであるが皆よく理解されたようで嬉しく思った。

大倭教について

昭和二十年八月十五日・終戦の日、大倭神宮にて、立教開宣し、神示により「大倭教」を名乗りあげた。同二十一年の七月に文部大臣認可による宗教法人大倭教を設立したのである。法人規則目的第三条に、

「この法人は教祖矢追日聖の立教開宣の本義に基づき、大倭太加天腹の大法を奉載して、大倭教の教義をひろめ、古神道の復活宣揚をはかり、祭祀行事を行い、信者を教化育成し、神宮及び教宮を包括し、その他この教団の目的を達成するための財務その他の業務を行うことを目的とする」

となっている。これは宗教法人設立の目的であるが、大倭教の教理は、

「万物一切、生成化育の大祖神、太加天腹大神に報本反始の祈りを捧げ、大宇宙の神ながらの法に知覚順応し、神人冥合、法味悦楽の境涯に悟入せしめ、もって、物心豊かで和やかな家庭、社会を人類にもたらすことを教理となす」

である。

右の如く大倭の御本尊は、大宇宙創成の生命体で、自然神として太加天腹大神（神示）と申している。この神が宗教的信仰の唯一の対象神である。神社その他に祭祀されている人格霊その他もやはり太加天腹大神の分神である。故に吾々と相互扶助の相関関係において、仲良く交流する小神であるから宗教的信仰の対象者ではないのである。吾々は大自然の摂理、自然界の妙不可思議な仕組を把握し悟るのが「神ながら法」であり、その自然界の実相を日常生活の中に生かし実践して行くのが「神ながらの道」である。大倭の指導の原理はこの「法」と「道」に在る。大倭教信人実践要綱は、一、敬神崇祖、一、神人冥合、一、顕幽不二、一、普遍平等、一、慈善博愛、一、相互扶助、一、協和勤労、となっている。参考までに記述したのであるが、尚霊示によって創設した財布一つに釜一つという生活共同体、大倭紫陽花邑（昭和二十二年発足）の三つの信条は今もなお大倭の人々の胸に脈々と生きているので、これを明記して擱筆することにする。一、地下水の精神、一、心身の健康、一、相互の扶助。

（平成元・十一・六・日聖記）

第324回大倭会文化行事報告(再録)

平成26年10月25～27日

新皇教宮を訪ねて

一枚の紙

紫陽花邑　杉本　順一

今回は10月25日からの2泊3日の旅である。一日目の諏訪大社（ご祭神は建御名方神）の下社は安中行きの御旅所程度に思っていたが、出発前に法主さんの奥津城に行って挨拶したら「タケミナカタワ　ナガソネノ　コドモタチ」と感じた。これでは軽く考える訳にはいかなくなった。お天気に恵まれてバスは出発した。どこまで走ってきたか、突然バスの中で溝口ツヤ子さんがつらそうな様子で横に座られた。建御名方神の話をしたら楽になったようだ。

下社をお訪ねして、かんぽの宿「諏訪」に入る。部屋では林修三さんとへぼ碁を楽しむ。

二日目、群馬県安中市の「新皇教宮」をお訪ねする。

持参したのは一枚の紙。これはこの度の旅行が決まる前の事、法主さん自筆の書類やメモを整理していて目にとまったものである。大きさは書道半紙の半分くらい。大きい字で「正覺坊大善神」とあった。その右肩には小さく振り仮名つきで「藤原秀郷」とあった。私は、平成14年5月に栃木の藤原秀郷公有縁の地を訪ねたことがあるのを思い出した。

小さな紙一枚だが、どのように保存するのか決めかねて手元に置いていた。

この度の文化行事予定が煮詰まってくるにつれ「一枚の紙」が気になってきた。

お訪ねする先は新皇教宮であり、お祭りの中心は「将玄坊大善神」つまり平将門公である。

坂東で931年以来、平家一族間の紛争、武蔵国司の内部対立、常陸の国司と住人藤原玄明らとの収納をめぐる対立が、複合的に絡まりあって発生した反乱事件を、天慶の乱（平将門の乱）と言う。

939年12月、将門が玄明を支援して常陸国司の藤原維幾を破り常陸国衙を占領、坂東諸国を次々に占領したため政府は反乱と断定した。将門は新皇と称し、兄弟らを坂東諸国司に補任し、坂東武士の多くを従えたが、940年2月、藤原秀郷・平貞盛ら反将門勢力に敗れた、とある。

（山川出版社『日本史広辞典』による）

平将門、藤原秀郷という敗者と勝者の二人が私の中で並んでいる。

安中の「新皇教宮」行きについては、10月15日に大倭神宮で挨拶した折、「ショウゲンボウ　オマチカネ」「シッカリタノム」と言われていたこともあったが、ともかく「正覺坊大善神（＝藤原秀郷の法名）」の紙一片を持参することにした。

バスは青木運転手のおかげで順調、高速道路出口で西川弘二さんが迎えてくれた。彼の先導で安心して約束の地に到着できた。入り口では程よい大きさの石に刻まれた「新皇教宮」の四文字が眼に入った。

教宮内に入ると中村家ご一統を始め西川家ご一統の皆さんがあわただしく祭典の準備をされていた。先に集まって来られた関東方面の方々もたくさん見えた。顔見知りの方も多く賑やかな交流が出来ていた。

湯浅芳郎さんが祭典準備完了、全員集合の声。

最初に中村孝明さんが代表して、今日を迎えることが出来た喜びと感謝の気持ちを万感の思いをこめて述べられた。

次いで私も時間をいただき話すことになった。持参した「正覺坊大善神」の紙一枚を示しながら、「この日の文化行事の目的を、敗者となった将門公一統の慰霊だけでなく、現界では勝者であった藤原秀郷公たちもまた今は霊界で多く修羅の世界にいることを知り、共に法主の示された〝和〟の光をお届けする祭典にしたい」と話した。

祭典は大倭の中島健さんが祭主となり、厳粛に執り行われた。

祭典後、近くの公民館に全員が移る。迎えてくださった皆さんの心こもるおもてなしを受けた。

成り行きで左隣に櫻井節子さんが座られた。食事中に節子さんに、藤原秀郷の法名の紙を見ていただく。私も彼女も無言である。突然「コレワサクライニ　タクセ」と法主さんの声。節子さんにこのことを伝えて、それを受けとっていただいた。

櫻井家に留めるのは気が重いのではと思い、「新皇教宮」でお預かりされてはどうですかと提案しておいた。

会食中、参加者全員（関東22人余・関西20人）が自己紹介、皆それぞれの浅からぬ因縁話が多数出て充実した時間となった。

夜は妙義グリーンホテルにお世話になった。夕食会は披露宴会場のように円テーブルで東方・西方が適宜に混ざり合えた。私の左が中村孝明さんだった。本当にゆっくり本音のお話が出来てうれしかった。

孝明さんはおっしゃいました。祭典前のお話を聞くまでは、「おのれ秀郷め！と、思っていましたが、法主様の和の光が本当なんですね」。この一言で文化行事を果たせた思いである。

教宮でお世話になった皆さんに、ただただ感謝です。

新皇教宮からの声

群馬県前橋市　内田　誓子

一昨年の秋のこと、新皇教宮の庭の南側に佇む銀木犀の古木が強風を受けて倒れた。かつて蔵があった時には脇に立ち、空気が澄む秋の訪れを、穏やかな芳香で静かに教えてくれた品の良い樹木だった。中村家に多くある古木の中で、主な古木の一つであった。銀木犀の直径は50㎝以上あることから、少なくとも200年以上の樹齢だと思われた。実は、これについては、当地での中村家最後の当主である祖父・文太郎が生前親しみ、詠じた短歌を歌碑にして記念に建立したいが、築山の隣、銀木犀の前方辺りがちょうど良い場所だろう、と私の母（櫻井節子）が思い始めてから数か月後の出来事だった。「晩年は平将門公の霊地を守ることを一途な心で務めた祖父に対して、またこの土地で人生を過ごした歴代の先祖に対しても『一つの大きな節目の証』という意味の記念碑」だと、母は語る。他の植木や傍らに塀もある狭い場所であったが、どちらも傷めずに気遣うように銀木犀は横たわっていた。大きな古木であり、それから半年を経てなお緑の葉を残す姿に対処を考えさせられたが、傾いた銀木犀からは、「もう充分に自分の命を生きた。どうか、土に還して欲しい」という思いが母に伝わってきたという。古木の思いを受け止めこれまでの長い年月を労り、和ませてくれたこと、さまざまな時代の変化を見守ってくれたことに一同が感謝の思いであった。

昭和63年3月、中村家の敷地に棲息する武将霊を「将玄坊大善神」として、法主さんに御霊鎮めを行っていただいてから、今年3月で38年目を迎える。祖母・きよが病で倒れ、一族の贖罪の役目を引き受けるかのように病床で不自由な13年間を送ったが、この状態の祖母を「救いたい」と願う伯母や私の母達兄弟姉妹の心の原動力が、新しい動きの契機であったことは間違いない。そして、馬場美佐子と石川千鶴子、二人の伯母が実家である中村家の霊的障害に関係するという、敷地に纏わる霊人について知るために奔走して大倭への扉を開くことに繋がった。すべては、ここからが始まりであった。自然の流れに従って歯車は回り始める。法主さんに巡り合うことが出来たご縁のお陰を改めて感じる38年目でもある。また、平安時代の霊人達に先立ち、中村家の敷地は縄文時代後期頃に祭祀を行っていた霊人達（「中村家の大先祖」）の棲息地でもあるようだ。時代を隔てても同じ土地・場所を基軸に縁が巡り、心を継承する者が現れて関わり合うこの現象に、自然の働きがもたらす奥深さを思うのである。

▲新皇教宮で櫻井節子さんと野宮柾俊さん

平成26年10月、大倭の文化行事で来訪された杉本さんから「正覺坊大善神」と記された紙が母に託された。当初、平将門公と藤原秀郷公の経緯を知る上では少なくとも驚きを覚えたが、秀郷公をお迎えしてして10年経ち、これまで以上に落ち着きのある穏やかな霊地として感じられる。法主さんから発せられた一枚の紙が、新皇教宮の地で霊人達の和合に結び付いた。何という稀有な巡り合わせだろうか。現界の動きによって、霊界ではお互いが安らかな心を得て、和らぎの気が生まれる。現界と霊界も不可分の関係にあるからこそ、共に協力していくことの意味を改めて感じている。こうした事象を通して、大自然の計らいの中から感じられる温かい慈愛に、目頭が熱くなるのである。新皇教宮の地も和らぎの気が生まれるように、その本質の大自然（大祖神）の気に順応する起点の場所として胎動していく、そうした道を示しているかのように思えている。辿ってきた道を振り返られる程の時間の流れが必要であったことに、今では納得がいくのである。

これまで、中村家の敷地から本来の霊地に戻すという働きを母や伯母達が精一杯、尽力してくれている。迷いや心配が尽きない中で、決して簡単なことではない。傍らで様子を知る者としては、一筋縄ではないことも理解している。一方では、霊人の碑はもとより、新たに植樹された木々や花などのささやかな所でさえも、手を掛け、思いを込めてきた人達の魂が感じられるのである。この地は、そのようにして、整えられてきた霊地であることを受け止めていきたいと思う。祖父の歌碑を建立することは、出発点からこれまでの経緯の中で、一つの時代の潮流が変化を迎える節目であり、新たな始まりの意味を象徴する大切な証である。銀木犀の古木についても、一連の流れの節目にある出来事と重なるように思えている。

もうじき春が来て、霊地も花盛りになる。大倭との縁が結ばれた春がまた訪れる。里では鶯(うぐいす)が鳴き、柔らかな花の香りに包まれる。今は、僅かに集う仲間が庭を清めてくれる。人知れず通って庭の手入れをしてくれる人、高齢になっても遠方から月次祭に通う伯母達の存在がある。庭の手入れを、主になり作業する高齢の父の姿もある。それぞれに関わる人の力で支えられている。「この場所を清らかな、きれいな場所にしたい」と願う母の思いがある。「今できる最大の事を、前向きに行っていきたい」という。心を注いできた母の思いである。関係者がさらに高齢になり、代変わりが現実味を帯びている中、霊地を残すためにできることを模索していく必要がある。

大倭会文化講演会報告1

「戦没者遺骨の戦後史～未完の戦争」参加記

大阪市　劉(ユ)　成道(ソンド)

２０２４年11月10日、大倭拝殿にて大倭会文化講演会が開かれ参加しました。講演者は毎日新聞学芸部所属の専門記者である栗原俊雄さん。１９６７年生まれで、早稲田大学政経学部卒業。日本の近現代史、戦後補償に関する著書が多数あり、各所で講演活動を積極的に行っている方です。

講演会のタイトルは「戦没者遺骨の戦後史～未完の戦争」。会場には50名ほど集まっていたように見えました。

講演は、久しぶりに奈良に来て、散策された話でアイスブレークした後本題に移りました。戦闘は終わったが、戦争は終わっていないという話、そういう現実において新聞が果たす役割について、終始情熱的に語られました。

講演中の栗原俊雄さん

私の危機感

そもそも、なぜ私が本講演会に参加したのかについて、少し紙面を割いて述べたいと思います。

まず、着実に身近に戦争が近づいてきているという感覚があるということがあります。

個人的に今でも危機感を抱いている日本の政策転換点があります。それは２０１４年安倍晋三政権時に武器輸出三原則に代わる「防衛装備移転三原則」が閣議決定されたことです。「防衛装備移転三原則」は１９７６年以来続けてきた武器の全面禁輸方針を転換する内容です。今でも報道で知った時に感じた不安を覚えています。この頃から「積極的平和主義」という言葉が使われ出し、翌年には集団的自衛権を容認する安全保障関連改正法が国会で可決されました。

２０２３年12月、政府は迎撃ミサイル「パトリオット」について、ライセンスを保有する企業があるアメリカに限り、輸出できるよう運用指針を変更させたという新聞記事も目にしました。「防衛装備移転三原則」の決定から、ついに武器完成品が公的に輸出できることになってしまいました。同年、三菱電機がオーストラリア国防省と防衛装備品の共同開発事業の契約を結んだという発表も記事で見ました。日本企業が防衛分野で外国政府と直接契約を結ぶのは初めてであると言います。

これまで日本は「専守防衛」つまり、他国から武力攻撃が行われた後、自衛に限り武力行使する立場を堅持してきましたが、あっという間に、相手の領域内を攻撃する能力を保有する国に変わってしまいました。

並行して、世界ではロシア・ウクライナ戦争、イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区に対する執拗な軍事攻撃、子供や女性を中心に、罪なき一般市民の大量虐殺が繰り返されています。アジアでも、中国脅威論、台湾有事について日常的に耳にするようになり、朝鮮半島南北関係はいつ軍事衝突が起きてもおかしくないと思われるほど緊張感が高まっています。

こうした情勢は日本で暮らす私たちにとって、今までになく戦争が身近に迫っていることを思わせます。

価値観の多様化とそれらへの反動、経済のグローバル化と経済格差の進展。度重なる自然災害と、世界は不確実性が高まり各所で社会の分断が進行しています。そして、自己中心主義が台頭。もうすぐ戦後80年を迎える中、歴史の継承においても、不都合な歴史を消す、あるいはゆがめる動きが官民一体で行われていることに、私は危機感を持っています。二度と過ちを繰り返さないために、いつまでも、いつでも、振り返り、反省することが必要であると考えます。

奈良県には、天理市に柳本飛行場跡があります。ここでは、戦前飛行場建設のために、日本人と朝鮮人が強制労働させられた歴史があります。しかし、その歴史を伝えるための公園に設置された説明板が、２０１０年以降に、歴史修正を訴える団体の圧力と、それを受けた天理市によって、突然撤去されました。元々は天理市によって建てられた説明板でした。その後、志を持つ市民の手により、私有地に説明版が改めて設置されています。

社会問題を解決することも重要だが、解決に向けたプロセスが重要。この価値観はＦＩＷＣの

ワークキャンプで培われたものでもあります。並行して、私は在日コリアン青年のコミュニティ活動も実践してきました。この活動の中では、ルーツにまつわる歴史を共に学ぶことも活動の一つとして続けてきましたが、ここでも同じ価値観が尊重されました。いずれも学生や青年が中心・主体の活動でしたが、自分自身も年齢を重ね、その現場から離れました。他者との協同作業や時間をかけた対話、交流が可能な現場がない現実がある中、いわゆるレガシーをさまざまな人々、特に次世代へ、どう継承していくかを改めて考えるようになりました。その中で割を食った人々の、これまであまり光が当てられなかった人々やその歴史に焦点を当てたものを、現実社会の中で形あるものを残すことで、何かしらのきっかけで、人々の目に触れる可能性があります。あるいは、モニュメントがあれば、それを囲む形で人が集まる、今、そういった有形物を残す活動に私は関心を高めております。

終わらない戦争被害

講演会へと話を戻します。本講演冒頭で、栗原さんはなぜ戦争してはいけないか？と問われれば、被害が終わらないからと答えるとお話されました。戦争被害と戦後補償をテーマに、硫黄島の戦いについて多く時間を割き、他にもシベリア抑留、長生炭鉱、沖縄戦についても詳しくお話されました。

栗原さんが硫黄島の取材を初めて行ったのは２００６年12月６日。クリントイーストウッド監督作品『硫黄島からの手紙』『父親たちの星条旗』公開を受け、特集記事を担当することになったことがきっかけであるといいます。硫黄島では日本人とアメリカ人が激突して、日本人２万人、アメリカ人７０００人が犠牲になりました。

栗原さんはこの時の取材で硫黄島の戦いでの生還者３名と会われ、３人とも「せめて遺骨を返してほしい」という訴えを聞き、この時腰を据えて関わらないといけないと思われたと言います。

民主党政権は、遺骨収集に強い関心を持っていました。栗原さんは菅首相の視察に同行依頼を受け、２０１０年12月にも遺骨収集に同行されました。その時、たくさん遺骨が出てきて、茫然自失したといいます。遺骨を掘るのはその遺族であり、これではいけないと思ったとのことでした。

遺骨収集のため２０１２年７月に３回目の訪問された時のお話には驚きました。火山灰に覆われた土地に草が生えていますが、それは骨が養分となり木の根が絡みつき、草が生えたためといいます。この現象に、ある遺族は「かわいそうに。島で飢えていたのに、死んでからは木に食われるなんて」と言葉を残されたといいます。犠牲者は死んでも、どれだけ苦しさや悔しさを抱き続けているのだろうか、そう想像すると、気の毒極まりなく、戦禍に見舞われることなく穏やかに暮らしていることが、申し訳なく思ってしまいます。

還って来た遺骨について、政府は２００３年からＤＮＡ鑑定を始めました。これまでＤＮＡ鑑定で身元が分かった日本人は１２３１体。うち１２００人ほどはシベリア抑留された人。これは埋葬記録が残っていて、ＤＮＡ鑑定したことで分かったと言います。一方、硫黄島の遺骨は１００００体以上あがっているのに、ほとんど（２０２１年２月時点で４名しか）身元が分かっていないといいます。それは遺品が出ないと鑑定しなかったためです。栗原さんはこの実態を浮き彫りにし、方法改善を訴える記事を書き、それが、白真勲、川田龍平両議員を動かし、２０２１年に遺品縛りがなく身元確認できるようになったといいます。

恥ずかしながら、本講演を聞くまで、硫黄島の歴史を私は全く知りませんでした。戦争被害というと、広島・長崎の原爆投下、沖縄戦、東京や大阪といった都市部の空襲を思い浮かべます。日本には、多くの方々が不幸な最期を迎えた歴史がここかしこに埋もれているはずで、私たちはこういうことにもっと向き合わなくてはいけないのではないかと思いました。

講演後の質疑応答も心に染みました。

その中で、栗原さんのファンで、86歳の戦争遺児である男性からの発言がありました。

男性は、戦後30年（今から50年前）父親が犠牲になった関係で、ミャンマーの遺骨収集に帰還兵５名と共に行かれました。当初男性は、帰還兵のことをひどいことをした存在と考えていましたが、お供え物をした時、帰還兵だった方がひれ伏して「長いこと来れなくてすまない」と号泣しながら謝罪する姿を見て、戦争のことを伝えてほしい、伝えなくてはいけないと考えるようになったと言います。それから男性自身、遺骨収集体験について奈良の小中学校で講演活動を続けているとのことです。

他にも、ある女性からは、ご自身の母親の兄が学徒召集され、１９４５年８月16日にソ連との激戦の末亡くなり、３歳の時に帰還兵が遺品として腕時計を持ってきた記憶を持つとお話されました。戦争への思いを父から感じてきましたが、家族内では叔父や戦争について話題にすることがタブーとなっていたというお話もありました。戦争は同世代にしか伝わらない、若い世代に伝えるにはどうすればいいのか。戦後日本兵ＰＴＳＤの問題、語れる場所が必要ということを訴えられました。この日に、戦争体験者のお話を聞く機会を得

ることは想像すらしておらず、貴重な経験をさせていただきました。戦後80年にもなろうとしており、もうこういう機会はないに等しいとは言え、ますます、戦争の記憶を次世代へ伝える手段が問われています。

アメリカでは、しばらくすると第２次トランプ政権がスタートします。早速、トランプ次期大統領はグリーンランドとパナマ運河の獲得に軍事力行使を辞さないと発言したり、下に仕えることになるイーロン・マスク氏は「無能なバカ」といった汚い言葉で欧米首脳らを罵ったりしています。隣国韓国では、年の瀬に、国会が機能しないとして、尹錫悦大統領が戒厳令を発令し、武力により人々から言論の自由を奪い取ろうとしました。北朝鮮は相変わらず何度もミサイル発射実験を繰り返し、強硬姿勢を崩しません。

困難な局面においては、お互い協力しあい、打開しようとすればいいのにと思うのですが、世の中はその真逆で、保身のために自分を強く見せ、相手の対立心をあおる一方であるように感じてしまいます。対立をあおった先には、暴力そして戦争へと発展するのが目に見えています。そうならないように、栗原さんが何度も強調されていた「戦争は絶対にダメ、被害が終わらないから」という言葉を大切にし、自分に何ができるか、これからも考えていきたいと思います。（２０２４年12月記）

（ＮＰＯ法人「むすびの家」理事）

大倭会文化講演会報告2

新たな戦前にしないために

奈良市　森山　まゆみ

昔から戦争の映像を見たり、本を読んだりすると涙が出た。元々が涙もろい性質なので、もちろん戦争以外のものでも泣いている。でも、戦争に関するものに触れたときの感じ方は全く違う。これが実際にあった事、悲しい思い、苦しい思い、辛い経験をされた方がたくさんいた事を、知っていないといけない、忘れてはいけない、伝えていかないといけないという気持ちになる。だって今も戦争は起きている。いつでも誰でも自分の身に起こりうる事だから。

硫黄島に行かれた際のことで、戦没者の遺骨がある場所に草花が茂ると話されていた。遺骨を栄養にして根を張るそうだ。それを見たご遺族が「亡くなってもなお、殺される」と仰ったそう。ご遺族からすれば、戦地で亡くなり、安らかに眠るどころか遺骨までも植物の根に貫かれるという事に辛い気持ちを抱かれたことがうかがえる。

会うことも叶わなかったお父様を思い、高齢のご遺族が「おとうさーん」と慟哭（どうこく）されていたこと。また別の方が、自分の家族はどこに眠っているかわからないが、発見できた遺骨に家族を重ねていると話されていた事。まだまだたくさんの方が家族の許に帰る事はおろか、日本の地にも帰れていない。知識として知っている事でも、改めて「生」の言葉を聞き、胸がつぶれる思いがした。戦後などない、戦争で被ったご遺族の悲しみに終わりはない。

硫黄島についてだけではなく、朝鮮人と日本人の方が取り残されている長生炭鉱水没事故のお話も印象に残った。戦闘員ではないから戦没者とはされず、国として手付かず。市民団体の方が長年遺骨発見に取り組んでおられるそう。戦争が原因なのは明白なのに…。非情な線引きに苦々しい気持ちになった。

戦没者の遺骨が取り残されている事についての国の見解と実情に乖離（かいり）がある事。取材に行くまでにも、あらゆる場面で越えられない線が引かれ、並々ならぬ苦労を重ねられた事などを聞き、戦争というものだけではなく、それを起こしてしまった組織がどういう性質を持っているのか、改めて考えさせられた。

私の祖父母は全員長生きで、母方の祖父は被爆後の広島で作業していたにもかかわらず96歳の寿命を全うした。祖父母や親の愛情を受け、のびのび育った私は、戦争でご家族を亡くされた方が受けられるはずだったものを受け取ってきた。この有り難さをかみしめるとともに、悲しいことを起こしてはいけないと強く思う。

「戦争はだめ」皆が当たり前と思っているが、当たり前なことほどなおざりになってしまうのが世の常だ。

ホロコーストについての否定論が若者の間で広がっているというニュースを読んだ。ユダヤ人で作っている組織が２０２３年に実施した聞き取り調査で、「ホロコーストは実際に起きた事ではない」「犠牲者の数は誇張されている」という選択肢に同意した若者（18歳～29歳）が、成人全体と比べて高い割合だったそうだ。ありえないと思った。

私は何ができるかの前に、まずは「知ること」からだと思っている。今回の講演に参加したのも、自分がまだ知らないことを知りたかったからだ。自分に大きな力はない。でも、栗原さんが伝えてくださった事を、身近な人に伝えることはできる。たとえささやかでも、私は私にできる事をやってみよう。今の時代を新たな戦前にしないためにも。

初春や生くること趣味にせむ八十路　春子

（大倭印刷㈱勤務）

あじさい日誌

1月7日　奈良市の稲葉喜幸・雅子夫妻が来邑されました。

1月12日　午前9時半から西斎庭で恒例の「大とんど」が行われました。昨年の祖霊祭で読み上げされた経木を始め、お正月の神飾りなども火にあげられました。その際例年のお餅入りのぜんざいやフレンチトーストの他、今年はブタ汁などもふるまわれました。

午後2時から大倭拝殿で大倭会主催の禊会が開かれました。

「交流の家」でFIWC関西委員会の新年会が行われました。

1月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日は高砂市の山田芳史さんに案内され、宮城県大崎市の大内小百合さんとさいたま市の中家房江さんが大倭神宮に参拝し、紫陽花邑にも来られました。

1月17日　午前10時半から大倭大本宮拝殿において、大倭殖産㈱の事業にご協力いただいている方々と共に今年一年の安全祈願祭が行われました。

1月23日　午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が開かれました。この日は昭和40年1月の法話をお聞きしました。

1月27日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

2月1日　午後1時15分から教務本庁で玉緒祭用福豆煎りが行われました。芝香須弥さん、中村千久佐さん、中島充世さんのお三方。

午後6時から大倭会館で大倭町自治会役員会が開かれました。

2月2日　午後2時から大倭大本宮拝殿において玉緒祭が行われました。この日は昭和53年2月3日の玉緒祭の法話をお聞きしました。

午後4時前から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で行われました。

2月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日大分県佐伯市の檜垣かおりさんが大倭神宮に参拝、その後紫陽花邑に移動、教務本庁で杉本順一、林修三さんと歓談されました。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

（菅原園）

1月9日　昼食に外注食として希望者に中華料理のメニューを事前に見て好きな物を選んでもらい、注文して食べてもらいました。普段とはまた違う食事で中華料理が好きなご利用者も多く大変喜ばれました。

2月3日　職員の紙芝居を楽しんでもらい、午後から節分の豆まきを行いました。職員が鬼の格好をして館内を回り、ご利用者で鬼は外、福は内と声を出しながら力いっぱい豆を投げていました。今年一年の健康を願いながら楽しく参加しました。

（須加宮寮）

1月16日　希望食事会を行い、中華料理やお寿司・ピザなど、好きな物を注文しました。皆さんおいしそうに食べられました。

1月28日　音楽療法があり、先生が水仙の花をもってきてくださいました。季節の歌やリクエスト曲を皆で歌ったり鳴子を鳴らしたりしました。

（長曽根寮）

1月16日（デイ）　新年会でビンゴゲーム大会をしました。

1月27日（特養）　今年の干支のイラストと、ご利用者からの聞き取りによる職員が作成した絵馬をフロアに飾りつけ、季節を感じてもらいました。

（茂毛路園）

1月9日　新年のお祝いとして昼食時に創作料理（鍋料理）を入居者の皆さんに食べてもらいました。

2月2・3日　2日は節分で昼食時に恵方巻を食べてもらいました。そして、3日には職員扮する鬼が各居室を回り、入居者の皆さんに豆まきをしてもらいました。

新皇教宮の写真について

今回新皇教宮の貴重な記事を書いてくださった、群馬県の内田誓子さんが、表紙と4頁に掲載している写真を撮ってくださいました。

表紙の写真は新皇教宮で将玄昉大善神を祀っている場所付近、4頁は内田さんの母親の櫻井節子と野宮柾俊さん。野宮さんはボランティアで新皇教宮の境内の掃除や手入れを手伝ってくださっている方とのこと。この霊地が整えられているのは、教宮に思いを寄せるこのような方々のおかげと、内田さんは感謝の思いを語ってくれました。

（K）

編集後記

▼1月27日に李さんのお父さんが亡くなられたとの報を受けてお父さんのダイナミックでお元気な姿を思い出した。大倭では誰に会っても笑顔と大きな声で挨拶されていた、素敵なお父さん。私も主人が亡くなった時、かなり励ましていただきました。ご冥福をお祈り申し上げます。▼編集部も岸野デスクが亡くなってから1年経ちますが、お陰で無事発行出来ていることに感謝します。もちろん皆さんの協力がなければ続かないですし、編集部も一丸となって一層頑張りますので、これからもよろしくお願いします。（千）

▼本紙7頁の余白に「初春や生くること趣味にせむ八十路」との句を載せましたが、これは昨年2月9日に帰幽された本紙のデスク（主幹）として腕を振るってこられた岸野春子さんが詠んだものです。彼女が遺した手帳の昨年1月4日の欄にこの句が記されていました。80歳を目前にして急逝されたことを思うと、この句を前に複雑な気持ちにならざるをえません。▼新皇教宮についての特集を組んでみましたが、読み返してみて顕幽不二の世界の奥深さに圧倒されます。（哲）

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

3月6日（木）　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

3月9日（日）　午後2時より大倭拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）

3月15日（土）　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）

3月23日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。